



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3792 号 2017.7.25 発行

### 障害者殺傷事件 被告の幼い頃の記憶が差別意識に変化か

NHK ニュース 2017年7月25日

相模原市の知的障害者施設で46人が殺傷された事件から、26日で1年、殺人などの罪で起訴された27歳の元職員は「障害のある子どもの親がいつも疲れている様子なのを幼いころに見て不幸だと思った」と供述していることが、捜査関係者への取材でわかりました。捜査当局は、こうした記憶が施設で働く中で差別意識に変わったとみています。

この事件は、去年7月26日の未明、相模原市緑区の知的障害者の入所施設「津久井やまゆり園」で、入所していた障害のある人たちが次々に刃物で刺されて19人が殺害され、27人が重軽傷を負ったもので、元職員の植松聖被告（27）が殺人などの罪で起訴されています。

これまでの調べに対し、植松被告は「障害者は不幸を作ることしかできない」などと供述していることがわかっていますが、ほかにも「障害のある子どもの親がいつも疲れている様子なのを幼いころに見て不幸だと思った」と供述していることが、捜査関係者への取材でわかりました。植松被告は、小中学校のころから障害のある同級生と接していたほか、当時のやまゆり園の入所者とも交流していたということです。

植松被告は、施設で働き始めた当初は、入所者について「かわいい存在だ」などと周囲に話していましたが、その後、重い障害がある人について「生きていることがむだだと思わないか」などと発言していたということです。

捜査当局は、障害者やその家族に対する幼い頃の記憶が、施設で働く中で差別意識に変わったとみています。

この事件については、25日夜の「クローズアップ現代+」でも詳しくお伝えします。事件を起こした植松被告の手紙には何が？、事件の深層に迫ります。そしてこれまで語ることがなかった遺族がその胸中を語りました。

### 交流と発信「やめない」 相模原障害者殺傷事件あす1年 静岡新聞 2017年7月25日



職員と音楽を楽しむ施設利用者。静岡県内で障害者福祉に携わる人たちからは「障害者の生活を知って」と声上がる＝19日、静岡市葵区の重症心身障害児・者施設「つばさ静岡」

相模原市の知的障害者施設で19人が刺殺され、26人が重軽傷を負った事件は26日、発生から1年を迎える。未曾有の惨劇と被告の差別的な考え方に、静岡県でも多くの人が心を痛めた。障害者の生活を支える人たちは施設の防犯対策を進めつつ、住民との交流や情報発信を重視した運営を行い、共生社会の実現を求め続けている。

る。

「こんな事件のために私たちが目指してきた理想を変えて閉鎖的にしてほしくない」「私

たちがしている支援は一人一人に寄り添い誇れるもの」一。静岡市葵区の障害者施設「つばさ静岡」のホームページに職員の言葉が並ぶ。2016年8月、職員の強い希望で掲載することになった。

施設には重症心身障害児・者約60人が入所する。人工呼吸器が欠かせない人、頭に付けた棒で携帯電話を操作する人、職員の手を取ってダンスをする人。「一人一人違い、全員に幸せになる権利がある」と山倉慎二施設長。事件後、出入り口に防犯カメラを設置するなどの対策を講じたが「福祉系の学校に通う学生でさえ、彼らの生活を知らない。触れ合わなければ心の壁は取り除けない」と施設見学の受け入れなどに積極的な姿勢を見せる。

「障害者が置かれている現状をうやむやにしていけない」と訴えるのは静岡市障害者協会の牧野善裕会長。協会は事件直後に「緊急声明」を出した。「障害者は死んだ方がいいということなのか」などの訴えが相次いだためだ。

事件では、遺族の意向を受けて神奈川県警が被害者を匿名発表した。障害者や家族が抱える事情への配慮としての匿名と、「生きた証し」としての実名とのほざまで議論を呼んだ。重症心身障害を抱える長女（31）を持つ牧野会長は遺族の意向を尊重しつつ「障害者が地域で暮らすという理念が確立されていないことがあぶり出された」と指摘する。

県内の知的障害者施設でつくる県知的障害者福祉協会の八谷重之会長は「外に目を向ける契機になった」と事件を振り返り、「われわれはプロとして、障害者の代弁機能を強めていく」と力を込めた。

#### ■防犯対策強化にも力

県によると、相模原障害者施設殺傷事件を受けて、2016年度、障害者施設など41事業所が国と県の補助により防犯カメラの設置やフェンスの補修など防犯対策を行った。17年度は7事業所が助成申請した。

知的障害児・者施設約200カ所で行う県知的障害者福祉協会の調査によると、16年10月時点で侵入者対応マニュアルがある施設は半数ほどにとどまった。これに対し、県は防犯の手引きを作成し、各施設に対策強化を促した。県警は事件後、福祉施設に対し延べ120回以上、不審者対応訓練や防犯診断などを実施している。

多くの施設は利用者の地域生活のために施設を開放してきた。施設側はハード面の整備とともに、有事の際の職員の確保や夜勤態勢の強化、戸締まりの徹底などにも力を入れている。

入所者家族会の会長「今でも体震える」 やまゆり園 朝日新聞 2017年7月24日 献花をする大月和真・家族会会長＝相模原市南区、代表撮影



24日にあった津久井やまゆり園の追悼式で、入所者家族会の大月和真会長は「なすすべもなく命を奪われ、傷つけられた方々の無念さを思うと、今でも体が震える。そして、遺族がこの1年間に味わった苦悩を思う時、心が震える」と追悼の辞を述べた。要旨は以下の通り。

昨年7月26日は、よく晴れた空が青く高い日でしたが、未明に起こった未曾有の惨事で、津久井やまゆり園は途方もない混乱に落とし込まれました。元職員により19名の尊い命が無残に奪われ、27名という多くの方が負傷しました。

怖かったろうに、痛かったろうに。なすすべもなく命を奪われ、傷つけられた方々の無念さを思うと、今でも体が震えます。そして、ご遺族の皆さまがこの1年間に味わわれたであろう苦悩を思う時、心が震えます。「19の御霊よ、安らかに」と心よりご冥福をお祈りいたします。そして、私たちはあなた方のことを決して忘れません。

犯人はいまだに自分が犯した大罪に気づかず、「障害者はいなくなればいい」というむな

しい言葉で私たちの心を傷つけています。

この1年間、私たちは大きな不安と混乱の中で暮らしてきました。事件さえなければ、決して味わうことのない苦悩の日々でした。私たちのささやかな幸せが、わずか30分あまりの残忍な犯行で踏みにじられてしまった悔しさは、時に触れ、折に触れ、こみ上げてきます。卑劣な犯人を決して許すことはできません。

しかしながら、傷つけられた方々は全員生還し、仮移転先の横浜市港南区芹が谷の地に多くの仲間が集い、6月には笑顔がきらりと輝き、やっと1年ぶりに笑顔が戻ってきました。

園の再生を希望の地に、この地で4年間を過ごす自信につながっているような気がしています。

少しずつですが、以前の生活を取り戻しつつあります。19の御霊に「安心して下さい」と言えない悔しさはありますが、希望を持ってみな暮らしています。

この1年、本当に多くの方々から賜りましたご厚情と励ましに感謝いたします。山のような献花、本当にありがとうございました。

そして、耐えがたいこんな事実を乗り越えて、ここまで子供たちや兄弟姉妹を導いて下さいました社会福祉法人かながわ共同会、および津久井やまゆり園職員の方々に、心から感謝を申し上げます。

園の再生については、津久井やまゆり園が今後50年、100年と続く施設であることを念頭に、19の御霊とともに、心を合わせて取り組んでいきたいと思いをします。

## 障害者と生きる社会に やまゆり園事件1年 追悼式に遺族ら



しんぶん赤旗 2017年7月25日

「津久井やまゆり園」入所者殺傷事件の犠牲者追悼式で  
献花する参列者=24日、相模原市

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人の重度障害者が殺害された事件から26日で1年がたつのを前に、神奈川県と同市、運営する「かながわ共同会」は24日、同市内で追悼式を開きました。671人が参列。参列者の中には車いすや白杖（はくじょう）を使うなど障害者の姿も。

式壇中央には、仲間たちが哀悼の意を込めて折った「やまゆりの花」が標柱を支えるように咲いていました。

黒岩祐治県知事が式辞で「利用者が安心して生き生きと暮らせる園の整備は県の大きな責務。この悲しみを大きな力に変えて共に生きる社会を実現していく」と表明しました。

同園の入倉かおる園長は「1年たっても悲しみは続く。それでも私たちは、いま目の前にいる一人ひとりと寄り添い、事件前の暮らしを取り戻すまで誠心誠意尽くしていく」と追悼の辞を述べました。

参列者が献花し、日本共産党からは畑野君枝衆院議員（代理）が献花しました。

東京都世田谷区から車いすで参加した横山晃久さん（62）は「優生思想反対の立場をはっきり示したいと思い、参加しました。第2、第3のやまゆり園事件を起こしたくない」と語りました。

式後の会見で黒岩知事は、式前の遺族との対面にふれ「多くの遺族から『やまゆり園をもとのように戻してほしい』と声をかけられた」と述べました。

家族会「みどり会」の大月和真会長は「やまゆり園は“秘境の地にあり支援が劣悪だ”というでたらめが流れているが、地域の中で受け入れられてここまで育っている。支援は日本一ではないか。ぜひ、取り戻したい」と強調しました。

## 相模原事件1年

佐賀新聞 2017年07月25日

「どうもー、こんにちはー」。昼近く、企業などに弁当の配達で訪ねる隆史（たかし）さんの声が響く。武雄市の社会福祉法人「ゆずり葉」が運営する弁当製造の福祉事業所「ゆめランチ」で働く。30代後半の彼は知的障害者。注文の弁当を、自転車で近くに配って回るのが役割だ◆「彼はどうもーって行くのが好きなんですよ」と「ゆずり葉」理事の梶川靖弘さん（53）は笑顔で語る。1人暮らしのお年寄りなどにも、何人かで手分けして届けている。それぞれできることをとの考えで、本人たちも仕事として責任感を持って取り組み、やりがいを生んでいる◆市内の新興商業地域である現地に、生活介護施設を併設して越してきたのはこの4月。あえて目立つところを選んだ。知的、精神、身体障害者34人が仲間だ。自閉症と知的の重複障害のある梶川さんの長男も通う◆相模原市の障害者殺傷事件から明日で1年。事件は障害者を取り巻く社会の有（あ）り様（よう）をも問うた。梶川さんは「障害者が暮らせる場所が、誰にとっても生きやすい社会のはず」と能力だけで価値を決めるのではなく、みんなが人間らしく生きられる仕組みの必要さを思う◆ただ手を差し伸べてもらうだけでなく、自分たちから街中に出て行き、知ってもらうことが大事ー。知らない不安が差別や偏見を生む。梶川さんはそう考えている。（章）

## 発達障害、対応医師養成へ 福岡県、九大を拠点病院に指定

産経新聞 2017年7月25日

福岡県は九州大学病院（福岡市東区、石橋達朗病院長）を、発達障害者の支援拠点病院に指定した。県内では発達障害者を診療できる病院不足が課題となっており、九大は県の支援センターなどと連携し、医師やスタッフの養成を図る。

県内の発達障害者は、30歳未満で9万6千人と推計される。これに対し、診療できる精神科などを持つ医療機関は124機関（平成27年10月）にとどまる。新患の診察は平均3～4カ月待ちだ。

九大病院は平成22年に「子どものこころの診療部」を設け、多職種による診療チームが乳幼児期、学童期、青年期といった年齢やライフステージに応じた治療や支援を手がける。

九大病院は今後、県内の医師を対象にした専門知識の研修や、地域のかかりつけ医からの相談対応などに取り組む。

専門機関から病院への診断依頼や、病院から各機関への療育要請が円滑に進むよう、ネットワークの充実も図る。各機関が連携し、患者の早期ケアや身近な場所で診療を受けられる態勢作りを目指す。

厚生労働省が推進する支援事業に基づき、九大病院は国と県の補助を受け、対応医師を増員し、4人体制にする。臨床心理士も4人配置する。

診療部の山下洋特任准教授は「医学的側面からも支援強化が求められており、支援を切れ目なく継続させることが必要だ」と話す。

## 障害者再就職で運営法人に勧告 5事業所閉鎖で支援不足と倉敷市

山陽新聞 2017年07月24日

倉敷市内にある障害者の就労継続支援A型事業所5カ所が今月末で一斉に閉鎖され、働く障害者約220人が解雇予告を受けた問題で、同市は24日、障害者の再就職について便宜提供が不十分として、4カ所を運営する一般社団法人「あじさいの輪」と1カ所運営の株式会社「あじさいの友」（いずれも同市片島町）に、閉鎖までに障害者の受け入れ先を見つけるよう勧告した。

障害者総合支援法に基づく対応で、28日までに改善報告書の提出を求めている。

二つの運営法人・会社は同じ男性が代表を務めている。同市職員が兼用事務所を訪れ、主体的に再就職先を探す▽障害者の要望を聞く▽経緯を記録する—ことなどを求める勧告書を男性に手渡した。

同市によると、解雇予告された障害者のうち引き続きA型事業所での就労を希望するのは165人（21日時点）で、再就職先が決まったのは13人ととどまる。13人の受け入れ先は、男性が取締役を務める会社が運営するA型事業所という。

解雇予告を受けた障害者には倉敷市外からの利用者も含まれていることから、岡山県は24日の県議会常任委員会で、保健所での相談や再就職支援に取り組む方針を示した。

県によると、倉敷市外からの利用者は浅口市や早島町など7市町の26人。希望者には備前保健所（岡山市）備中保健所（倉敷市）同保健所井笠支所（笠岡市）で解雇予告による不安解消のための相談に応じる。倉敷市内の利用者も相談可能。

### 障害者支援へ、県西圏域初の拠点 12月オープンに向け整備 日光



下野新聞 2017年7月25日  
障害者の地域生活支援拠点の「すぎなみきタウン（仮称）」の外観パース（社会福祉法人すぎなみき会提供）

【日光】市と鹿沼市でつくる県障害保健福祉圏域の県西圏域で初めて、障害者の地域生活支援拠点となる施設が12月、板橋にオープンする。相談支援やグループホーム、緊急時の短期入所、カフェやパン工房のほか、全国でも珍しい美容室に取り組む就労継続支援B型など8事業を行う計画で、障害者支援と地域に開かれた施設を目指す。

支援拠点は、障害者の生活の場を病院や入所施設から、グループホームや自宅へ移す「地域移行」を進めるのが目的。2017年度までの県障害福祉計画4期計画では、圏域ごとに1カ所以上の整備が盛り込まれている。

支援拠点は、障害者の生活の場を病院や入所施設から、グループホームや自宅へ移す「地域移行」を進めるのが目的。2017年度までの県障害福祉計画4期計画では、圏域ごとに1カ所以上の整備が盛り込まれている。

県西圏域では、社会福祉法人すぎなみき会が板橋に「すぎなみきタウン（仮称）」を整備し取り組む。施設は重量鉄骨2階建てで、延べ床面積約1950平方メートル。既に着工し、11月12日に竣工（しゅんこう）式を行う予定。

グループホームは定員12人、短期入所は同8人を設けるほか、緊急時の短期入所の同3人を用意する。障害のある小学生から高校生を対象にした放課後等デイサービスや、未就学の障害児の保育も行う。

### 熱中症死亡事故の施設 利用者2年で倍、常勤職員は1人 松浦新

朝日新聞 2017年7月25日

埼玉県上尾市の障害福祉サービス事業所「コスモス・アース」の送迎車で男性利用者（19）が熱中症で死亡した事故で、事業所の利用者が2年余りで2倍以上に増えていたことが、県への提出書類でわかった。一方、県によると、介護にあたる生活支援員の常勤は1人。厚生労働省や県によると、常勤1人でも法的に問題はないという。県や県警は、当時の状況について詳しく調べている。

事業所を運営するNPO法人コスモス・アース（本部・さいたま市北区）が県に提出した事業報告書によると、事業所が運営を始めたのは2014年度。同年度末の利用者は13人だったが、16年度末には28人に増加。監督する県は17年度、30人だった定員を40人に増やすことを認め、今年4月の利用者は34人となっていた。

一方、施設で利用者を介護する「生活支援員」24人のうち、常勤は障害者総合支援法

に基づく厚生労働省の基準で最低限必要とされる1人。非常勤23人が交代で勤務することで、必要な職員数を確保している計算になっている。

**鬱病からの再就職「大好きなアパレルで働けて幸せです」** 産経新聞 2017年7月24日  
鬱病を経験した後、再就職して働く吉原夕香子さん＝大阪市西区のアーバンリサーチ本社（須谷友郁撮影）



女性に多い鬱病。重症化すれば、気分が落ち込むだけでなく食事や睡眠などもままならず、いったん職場を離れざるを得ない人も少なくない。こうした人たちの再就職や復職をサポートする就労移行支援施設は増えており、障害者として一定の配慮をしながら活躍の場を提供する企業も出てきた。

「大好きなアパレル業界で働けて幸せです」

全国に約300店舗を展開するアパレルメーカー「アーバンリサーチ」（大阪市西区）の本社で働く吉原夕香子

さん（33）はほほ笑んだ。さまざまな障害を持つ12人が所属する「業務サポートチーム」で、ウェブチームのリーダーを務め、オンラインストアのトップページに掲載する商品の在庫調査や、伝票作成などを担う。

吉原さんは別のアパレル店で販売員をしていた平成22年12月、鬱病を発症。一日中涙が止まらなくなり、食事も取れなくなった。年明けのセール準備で最も忙しい時期のため、早く出勤しなくてはと焦ったが、働ける状態ではなかった。携帯電話の電源を切り、家に閉じ籠もった。

2年以上療養した後と同じ店でまた働いたが、長時間勤務によって体調が悪化。睡眠薬を飲むと翌日には集中力がなくなった。生活のリズムが崩れ、退職。実家で過ごしながらも「このままではいけない」と焦ったが、どうすることもできなかったという。

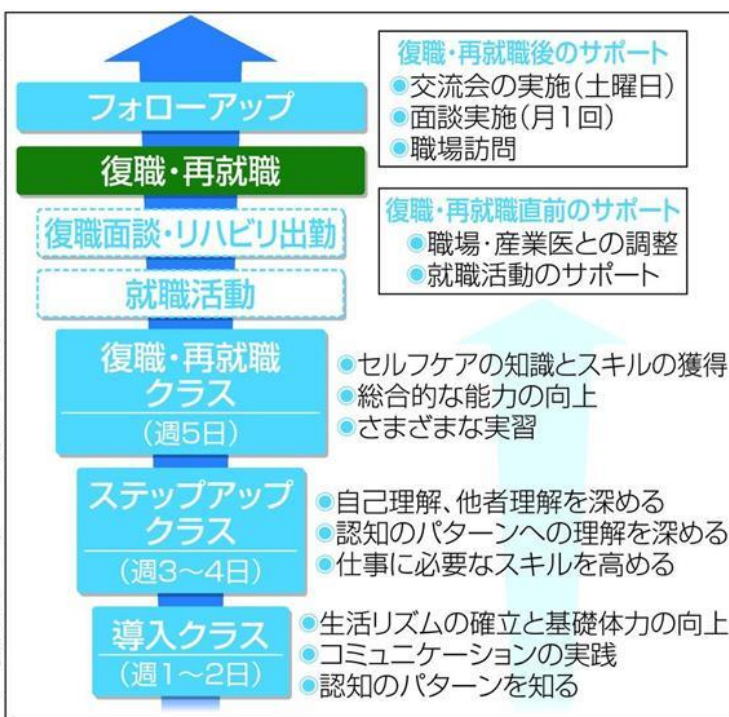
転機になったのは、26年夏から通い始めた大阪府豊中市の就労移行支援施設「ワンモア豊中」だ。当初は2週間に1回が精いっぱいだったが、翌年3月ごろから回数が増え、やがて毎日朝から夕方まで通えるようになった。27

年6月にアーバンリサーチに入社。現在も気分が落ち込むときはあり、月に1回は通院している。それでも「新しい業務にもチャレンジしたい」と意欲的だ。

来年4月に施行される改正障害者雇用促進法で、企業などが雇うべき法定雇用率の算定に、新たに精神障害者が加えられる。これに伴って企業の法定雇用率も2・2%に引き上げられ、就職を目指す障害者にとっては、受け入れ先が広がる可能性が高い。

厚生労働省によると、障害者の一般企業への就職を後押しする就労移行业務所は全国に

ワンモア豊中の就労移行支援サービスの流れ



約3200カ所あり、約3万1千人が利用。ワンモア豊中では鬱病などの人がパソコンやビジネスマナーなどを学びつつ、毎日午前10時ごろから午後3時半ごろまで通うことで、生活リズムを整える。ヨガやアロマ、メイクも取り入れ、約50人の登録者のうち3~4割が女性。統括所長の芳賀大輔さん(43)は「女性が少しでも来やすいように工夫しています」。

就職した後も、病気とのつきあいは続く。アーバンリサーチでは病状を考慮しながら勤務時間などを柔軟に設定。障害のある人らによる「業務サポートチーム」では人事、総務、経理、ウェブ、研修といった多彩な仕事を請け負うが、それぞれの仕事内容を共有することで、休んだ人がいてもお互いにフォローしあう。

担当者がきめ細かく面談し、仕事上の悩みを聞いたり、解決策をともに考えたりする態勢も敷いている。ワンモア豊中でも、週末に復職した人たちの交流会を開いたり、月1回の面談や職場訪問を行ったりしてフォローしている。

芳賀さんは「職場以外の人に気持ちを吐き出すことで、落ち着くこともある。就職で終わりではなく、定着するまで必要に応じてサポートを続けていく」と話している。

焦らず一歩ずつ進みたい

アーバンリサーチが、障害者として雇用した人の受け入れ部署「業務サポートチーム」を立ち上げたのは平成27年。シニアチーフの貴志真吾さん(33)は「一人一人をしっかりフォローしながら、能力を発揮できる場を作る必要があると考えた」と振り返る。

今ではウェブや新人研修などさまざまな業務を請け負い、不可欠なポジションに。「焦らずに一歩ずつ前に進みたい」と話す吉原さんからは、仕事への誇りが感じられた。(加納裕子)

### 「こころの先生」育成へ研修会 養護教諭対象に大津市教委 中日新聞 2017年7月25日

悩みを抱える子どもたちに寄り添う保健室の機能を充実しようと、大津市教委が養護教諭の研修会を始めた。発達障害やLGBT(性的少数者)の子どもへの対応など、今日的な課題も盛り込む。十九日の初回には約七十人が参加。市は養護教諭の増員も進めており、サポート態勢を充実して人材確保にもつなげる考えだ。

「職業柄、先生は相談を受けるとつい答えを出してあげたくなる。でも子どもはそんな答えは求めているのです」。この日、ロール・プレイ方式の相談対応の練習で、講演したおうみ犯罪被害者支援センターの松村裕美理事は強調した。

例に挙げたのは子どもが性犯罪の被害に遭ったケース。加害者が親族である場合など、



言い出しにくいことが多い。事実を聞き出すには時間がかかるが、すぐに対処が必要な場合もある。松村さん(右)の指導を受け、ロール・プレイ方式で相談対応を練習する養護教諭ら＝大津市本丸町の市生涯学習センターで

成績評価に関与しない養護教諭には、子どもは悩みを打ち明けやすい。スクールカウンセラーと異なり常勤で、けがや病気に限らず休み時間に保健室を訪ねる子どもも多い。何げない会話から異変を知ることもある。そのため市教委は昨年度から、中規模以上の学校に複数の養護教諭配置を目指し、独自財源で増員を進めている。

市内の養護教諭ほぼ全員でつくる自主的な研究会も長年続いているが、対応の技術は教諭の経験により差がある。インターネットの普及などで子どもが抱えるトラブルも多様化している。新たな研修会では、教諭の対応力向上と情報交換を進める。来年二月までの十三回。十回出席した教諭を「こころの先生」と認定する。講師には大学教授やカウンセリングの専門家を招き、心の相談の基礎から実践までを学ぶ。

人材確保には難しさもある。本年度は嘱託の養護教諭を二十人増やす予定だったが、急な募集だったため、増員は十一人とどまった。市教委の職員が近隣府県の大学を訪ねたり、退職した元教諭に声を掛けたりして補充に努める。市教委学校教育課の担当者は「若い教職希望者に大津を選んでもらうためにも、こうした研修やサポート態勢の充実が重要だ」と言う。研修会に参加した小学校の養護教諭（50）は「養護教諭だけでは子どもたちの悩みを解決できない。研修と同時に、学校全体で教員間の風通しを良くすることが大事なのでは」と指摘した。（野瀬井寛）

## 誰でも楽しい『フラ』踊れるよ！ 振り付け収録DVD100枚製作



福島民友 2017年07月25日  
いわきオハナフラ完成をPRする佐藤副理事長（左）らと、いわき観光情報ナビゲーターのフラおじさん（右）

いわき市のフラ文化の浸透へいわき青年会議所（JC）が市の協力で誰でも楽しめるフラ「いわきオハナフラ」を開発した。振り付けを収録したDVDを100枚製作、市内の中学校や公民館などに配り、多くの人に踊ってもらえるようにする。同JCの佐藤岩二郎副理事長、三室志帆いわきの文化確立委員長らが24日、記者会見

した。

市民の絆がフラで強まるようにとの思いを込め、ハワイ語で家族や仲間を意味する「オハナ」を名称に入れた。同市のスパリゾートハワイアンズ・ダンシングチーム「フラガール」を1期生から指導するカレイナニ早川さんが振り付けを担当。高齢者や障害者も楽しめるよう、手だけの振り付けも考案した。

音楽は、ハワイの楽曲「フォー・ユー・ア・レイ」を使用し、同JCがいわきをイメージした歌詞を付けた。DVDにはフラガールのアウリイ晴奈さん（いわき市出身）と市内の中学生が出演する。アウリイさんは「幅広い年代に楽しんでもらえる振り付け。歌も覚え、歌いながら踊ってほしい」と話した。

いわきオハナフラは同市小名浜の小名浜潮目交流館で30日に開かれるイベントでお披露目されるほか、動画投稿サイト「ユーチューブ」で公開される。

## 四国八十八カ所 三十番札所・善楽寺のストラップが人気 毎日新聞 2017年7月25日



好評を呼んでいるストラップ=高知市一宮しなね2の善楽寺で、柴山雄太撮影

四国八十八カ所の三十番札所・善楽寺（高知市一宮しなね2）で、お土産用のストラップが隠れたロングセラー商品になっている。地元の障害者施設で作られており、10年以上たった今でも品切れになることがある人気の品。関係者は「人気はやりがいにつながる。これからもずっと続けていければ」と話している。【柴山雄太】

ストラップはお遍路さんをイメージした、わらじや金剛づえ、かさを組み合わせたデザイン。かさには空海と共に歩いているという意味の「同行二人（どうぎょうににん）」

「三十番 善楽寺」と印刷されている。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

